

『今月の天候と農作業』

通巻第5551号

1月号

平成24年12月28日発行

宮崎県

宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	40	40	20
降水量	九州南部	30	30	40
日照時間	九州南部	40	30	30

【概要】

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、低い確率60%です。

＜1週目の予報＞ 12月29日(土)～1月4日(金)

天気は、太平洋側では晴れる日が多く、東シナ海側では気圧の谷や寒気の影響で曇りの日が多いでしょう。期間のはじめに気圧の谷の影響で雨の降る日があるでしょう。

(詳しくは週間天気予報をご利用ください。)

気温は、低い確率60%です。

＜2週目の予報＞ 1月5日(土)～1月11日(金)

天気は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

＜3週目から4週目の予報＞ 1月12日(土)～1月25日(金)

天気は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆ 早期水稲

1 種子予措

作柄の安定は健苗づくりからはじまります。播種までの種子の準備をしっかりと行っておきます。

① 優良種子の選別

採種は産の種子を10畝当たり、3.5～4.0kg準備し、枝梗などよく取り除きます。発芽勢の良い種子を選別するため、水10%に食塩を800g入れて塩水による選別を行い、沈んだ種子を水洗いし種子として使用します。

② 種子消毒

種子消毒時の袋詰めは、袋に余裕を持たせ薬液が中心部の粃にも十分付着するようにします。薬液に浸す際に粃に気泡が付いていると、効果が低下しますので、揺するなどして網袋や粃の気泡をよく抜きます。薬剤効果は水温にも影響され、薬液の温度が10℃以下では効果が劣る場合と、20℃以上では発芽障害が発生する場合などあるので、薬剤毎の温度や時間など使用方法を守ります。生物農薬や温湯消毒も同様です。種子消毒後の扱いも消毒方法によって異なりますので、注意し浸種作業へ移ります。また育苗箱等の資材も消毒しておきます。

③ 浸種

浸種は発芽揃いを良くするために低温でじっくり行うことが大切です。種もみを浸す水の量は、種子粃一に対し水二の割合とし、水温は10～20度の範囲で温度変化の少ない日陰で行います。水温が10℃の場合は10日間、15℃の場合は7日間程度と浸種期間は十分とります。この間の水の交換は薬剤効果を安定させるため3日目以降から行い、その後は2～3日間隔とします。一度に多くの種子袋を重ねて浸種を行う場合は、時々上下の位置を入れ替えるなどして、粃への温度や酸素供給が均等になるようにします。十分に浸種してくると粃の胚の部分の部分が白く見えるようになります。水温が20度以上では、出芽むらが生じやすくなります。

④ 催芽

浸種後は、催芽（芽出し）を行いますが、30℃～32℃で一昼夜程で行い、芽が1cm程度伸びた鳩胸状態になるまでとします。

◆ ムギ類

① 麦踏み

麦踏みの効果は耐寒性と耐干性を高めたり、分げつの増加、稈の伸びすぎを抑えて倒伏を防止するなどあります。節間が伸長し始める前の2月中旬までに2～3回実施します。霜や露があるときや麦の水分が高いときに行うと、茎葉の損傷が大きいので、土壌や株の水分が低い乾燥した時がよいでしょう。

② 追肥

ムギは施肥による影響が大きい作物です。1月中旬に分げつ肥として窒素成分で10㎡当たり2・5kg程度追肥し、条播きの場合は土入れします。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ 共通事項

厳寒期となります。午前中の温度を十分確保し光合成を促進します。午後からの換気は急激に温度を下げないように注意が必要で、特に風が強い場合には風下側を中心に開放したり、谷換気の幅を小さくするなど、換気によってハウス内の温度変化が大きくなるように十分注意します。また、風が直接作物に当たらないよう内ビニルにより調節を行うことが必要です。

また、翌朝冷え込みが強いと予想される場合には、夜間の暖房機の設定温度を普段より高めに管理します。

かん水は、晴天時の午前中の早い時間帯に行い、地温低下を防ぎます。追肥は硝酸態窒素主体の液肥で行います。

◆ きゅうり

促成きゅうりの摘心栽培では、孫づる、つる下ろし栽培では主枝となる子づるの収穫期となります。

① 摘心栽培では、草勢が低下すると、不良果が発生しますので、早めに摘果を行います。また、採光・通風を良くするために、ひ孫以降の成長点を2～3本確保しながら、込み合った場所の枝を整理します。

追肥は、10㎡当たり窒素成分で、月に5～6kgをかん水時に施用します。

② つる下ろし栽培では、寡日照、低温等の影響による「心止まり症」が発生しやすい時期となりますので、生長点の状態を確認しながら、弱い場合には摘果により草勢の調節を行います。摘果は3節に1果を除去します。

また、過度の摘葉は草勢低下を助長するため、着果節下5～6枚の葉を確保します。

追肥は、摘心栽培と同様に行います。

◆ ピーマン

促成ピーマンは、着果の状況に注意しながら肥培管理を行います。

着果量が多いと草勢が低下しやすい作物ですので、親指大の果実の着果が多い場合にはかん水を多めに行うとともに、夜温を普段より高めに管理し、果実の肥大を早めます。

また、追肥は遅れないように注意します。2月までは、月に10㎡当たり窒素成分で3～4kgを行います。

◆ トマト

トマトは野菜の中で、最も強い光線を必要とします。内張ビニルを十分開放し、光線の確保に努めます。また、果実の肥大、着色促進、食味向上のためには、15～18枚の葉を必要とするため、つる下ろし時の過度の摘葉は避けます。

◆ いちご

いちごは、成り疲れに加え、寡日照、低温等の環境により食味低下や小玉果となりやすい時期となります。大玉果、高品質生産を行うためには、光合成を高めることが重要となりますので、午前中の温度は26～28℃を目安とし、開花から45日程度で収穫できるように管理します。また、品質向上のため、1果房当たり10果前後に摘果します。

追肥は液肥を主体に、月に窒素成分で10㎡当たり2～3kgを目安としますが、吸水量、吸肥量ともに低い時期となりますので、かん水、追肥ともに生育を見ながら控え気味に行います。追肥は、多過ぎると根痛みを起すので注意します。

(郡司 孝幸)

葉茎根菜類・いも類

ハウスやトンネルによる半促成栽培の播種期及び早熟栽培の定植期となります。支柱立てやビニール被覆など植え付け準備を計画的に進め、適期に植付けや、は種ができるようにします。

◆ スイートコーン

ハウス、ミニハウスは中旬から、大型トンネルは下旬からは種適期となります。地温が低いと発芽率が低下するので、地温を高目に保持することが重要となります。は種1週間前までは、トンネル被覆を行い地温を確保して下さい。なお、早播きしすぎると、地温不足による発芽不良を起したり、桿が伸びすぎてトンネルを除く時期より前に、葉や雄穂がビニールに接触し、先端不稔等の品質低下を招きますので、播種期を守りましょう。来月播種する小型トンネル栽培の準備も始めましょう。

◆ 食用かんしょ

小型トンネル栽培の育苗～定植期です。換気に注意しながら、丈夫な苗に仕上げます。1月中旬以前の早植えは地温が十分に確保できずに肥大根の着生や伸長が悪く、丸いもになりやすくなります。定植時期は地温確保が可能になる1月末以降とし、定植の1週間前にはトンネル被覆を行い、十分に地温を確保して定植します。

◆ ばれいしょ

春作は下旬より植付け期となります。ばれいしょは植物防疫法の指定種苗となっていますので植物防疫検査印のある健全な種芋を用いましょう。種芋は30g程度の大きさのものが適していますが、芋が大きい場合には、切り割りして植付けてください。

◆ ごぼう

9月から10月にかけて播種した水田ごぼうが収穫期に入ります。収穫開始時期の目安は、トンネル栽培のものは播種後100日、マルチ栽培は130日くらいです。

(河野 健次郎)

果樹

1 常緑果樹

◆ 完熟きんかん

1月中旬から、完熟きんかんの出荷が始まります。収穫は、着色や食味を参考にしながら開始します。収穫が始まったら、過熟やうるみ果を防ぐために、昼温は15℃を目安に管理します。また、裂皮を防止するために、早朝の換気等により、施設内の湿度を低く維持しましょう。

完熟果実は、打ち身や圧迫による傷害を受けやすいので、収穫カゴ周囲の緩衝材設置や、果実の過度の積み重ねを避け、取り扱いには十分注意しましょう。

◆ マンゴー

今年は、秋季の低温により、花芽の動き始めが遅くなっています。一方で、剪定の遅れた園地では、夏季の日照不足に伴う枝の充実不足のため、萌芽のばらつきや質の悪い花の発生が懸念されます。このような園では、結果不良やミニマンゴーの発生が予想されますので、花芽が見え始めたら、早い段階からかん水を行い、芽が動きやすい環境を確保しましょう。また、昇温の過程を例年よりも慎重に行い、じっくりと花芽を作りましょう。

萌芽のばらつきから、開花期間が長くなり、適期防除ができないことも予想されます。開花前の予防的防除を徹底しましょう。

開花期に湿度が高くと、果実に灰色カビ病が発生し、果実品質が低下します。換気や夜間の十分な加温によって、湿度を低く保ちましょう。花穂が伸びてきたら、ひもでつり上げ、風通しを良くすることも重要なポイントです。加温用のダクトを使って病気の発生を抑制する方法もあります。普及センターやJAに相談してみてください。

また、満開期のホウ素剤の散布、幼果期のカルシウム剤の散布により、果実の生理障害を防止しましょう。

2 果樹全般

◆ 縮間伐・剪定

多くの果樹で、初期収量を確保するために、計画密植栽培が行われています。枝が隣の樹とふれはじめたら、縮伐や間伐を実施しましょう。

剪定においては、主枝、亜主枝の配置を考えた剪定が重要です。また近年、多くの果樹で、着花不良や結果不良が見られます。健全な樹勢を維持

し、適正な結果枝や結果母枝を確保するように、間引き剪定と切り返し剪定を組み合わせで行いましょう。

また、低樹高栽培は、収穫や管理作業の省力化、防除効果の向上に加え、風に強くなることで、傷果の減少や台風の被害も軽減されます。切り返しや間引きにより、数年かけて低樹高化を図りましょう。

◆ 苗の植え付け

苗木の植え付け時期は、秋と春です。春植えの場合、発芽直前に植え付けるのが、寒害回避や生育の観点から最適です。中晩柑類や落葉果樹等では、品種によって発芽期の早いものがありますので、作業が遅れないように注意しましょう。

初めて植栽する園地では、排水の良否がその後の生育や果実品質に大きく影響します。事前に十分に調査した上で、植え付けましょう。植え付け準備として、一ヶ月以上前に植え穴を掘り、有機物や苦土石灰、ようりんなどの土壌改良資材を施用しておきます。

定植適期になったら、植え付けを行います。根を十分に広げて、幹の発根部がわずかに地上に見えるように、やや浅植えにしましょう。植え付け後は十分なかん水を行いましょう。

(山口和典)

花き

◆ 電照ギク

白の主力品種「神馬」は親株や電照期間中に13℃以下の低温に合うと「幼若性」を獲得し開花が遅延します。1～2月に消灯する作型は花芽分化時期が1年中で最も低温期になりますので、夜温を十分に確保できるように暖房機の設定温度や停電・事故には十分に気を配って下さい。低温に遭遇した場合は、消灯1～2週間前から夜温15℃で予備加温を行って下さい。消灯後は18時から1時までは15℃、1時以降は12℃の変温管理を行うと大幅には開花が遅れず、暖房コストの削減が可能です。また、再電照時期の決定は品質向上の観点からも必ず検鏡してから決定するようにして下さい。低温期はハウス内の湿度も高まりやすいので白さび病が多発します。十分な換気を行うとともに、予防ならびに適期防除を心がけましょう。

◆ スイートピー

12月から気温も下がり、日照が多く、スイートピーに適した気象条件になっています。今期は天候に恵まれ順調に生育、開花していることから、草勢維持を心がけ、かん水や追肥のタイミングが遅れないように注意しましょう。また、極端にかん水を控えると需要期の2～3月にステムが短くなり商品価値が低下してしまう危険性があります。窒素肥料を追肥する場合、地温の低下するこの時期は、硝酸態窒素主体の液肥が効果的です。

◆ デルフィニウム

沿海地域のエラータム系は2番花以降の花穂が急速に抽台・伸長しますので、採光を良くして硬さとボリュームを確保して下さい。中山間地域のロゼット打破作型では抽だい時期になりますが、3月出荷に向けて生育ステージにあった温度管理を実施するとともに、軟弱徒長とならないように芽の整理を行い適正本数にしましょう。

◆ ホオズキ

早い産地では下旬から植え付けが始まります。毎年ネコブセンチュウや白絹病等が問題になっていますので、土壌消毒を行って下さい。土壌消毒にあたっては事前にビニルフィルム等でべたがけを行い、地温を上げておくとガスが拡散しやすく効果的です。また、地下茎からの病気等の持ち込みも見られますので、調整する際にセンチュウや白絹病が出ている地下茎を除去して下さい。

◆ ラナンキュラス

日中は採光のため内ビニールの開閉をしっかり行いましょう。日中は10℃を下回るような極端な低温管理ではなく、生育適温での管理を行いましょう。収穫が続くと草勢が低下しやすくなりますので、液肥を適宜施用して草勢の維持を図り、安定的な採花を行いましょう。

(中村 広)

畜産

平成25年がいよいよ始まりました。昨年の反省点を踏まえて今年の生産、経営の目標を立ててみましょう。まず家畜の生産記録、経営記録を徹底して、安定した経営を目指すのも非常に重要なことだと思います。

今月は1年間で最も寒さが厳しくなる時期です。家畜の生産性の低下や、子牛等の下痢、呼吸器系の疾病が多く見られる時期でもあります。以下のことを徹底して家畜の疾病を予防しましょう。

① 防風対策をしましょう

家畜の体に直接、風が当たらないように畜舎の補修、シートやコンパネ等を利用してすきま風が畜舎内に入らないよう注意しましょう。

② 換気対策をしましょう

昼間の気温の高い時間帯に換気を行い、アンモニアなどの有害物質を除去するとともに、新鮮な空気を取り入れましょう。

③ 飲み水の凍結対策をしましょう

早朝の家畜の飲み水の確保のため、水道管の凍結予防など事前にできる対策を行いましょう。また、この時期は子牛には出来るだけ温水を与え食欲の低下を防ぎましょう。

④ 幼畜の下痢対策をしましょう

子牛房等の敷料をこまめに交換し、乾燥したノコクズやワラ等を随時補充し、保温効果を高めましょう。遠赤外線の暖房装置等を利用した防寒対策も有効です。

一昨年1月から2月にかけて、県内の養鶏農場で13件の高病原性鳥インフルエンザが発生しました。県内で二度と発生させないためにも、農場全体の消毒を徹底するとともに、野鳥侵入防止のための防鳥ネットの破損や、鶏舎の隙間等がないか再点検しましょう。また、殺鼠剤などを使ってネズミ対策も充分に行い、ウイルスが農場内に侵入しないよう防疫対策を徹底しましょう。

(小坂 昭三)

特用作物

◆ 茶

1 寒さ対策

寒風や急激な低温により、幼木園や中切園では、成葉の寒害や幹割れ（裂傷型凍害）等の凍寒害の発生が懸念されます。被害を受けやすい茶園では、防風ネットや土寄せ等による対策を実施して下さい。また、山間地では積雪による枝折れや裂傷防止対策が必要です。

2 定植ほ場の植え付け準備

雨の少ない今月は、定植の準備を行う最終時期です。

茶は、定植後、摘採するまで4～5年かかることから、一度植え付けると植え替えが難しい作物です。新植に当たっては地域の気象や茶樹の特性を理解した上で、品種やほ場を選定しましょう。

茶樹は湿害に弱いため、茶園の土壌は、排水が良く耕土の深いことが求められます。

地下水位が高く、湧水が懸念されるほ場への定植は極力避けましょう。

粘質土壌で水はけが悪いほ場、水が流入するようなところは事前の対策が必要です。深耕による混層や明渠、暗渠等の対策を講じます。

また、アルカリ性の高い土壌や改植茶園、線虫の被害が懸念されるほ場では土壌消毒を早めに行い、併せて、土壌pHの調整やたい肥施用により地力増強を図りましょう。

(佐藤 邦彦)

◆ シイタケ

1 植菌と仮伏せ

労働力の分散や病虫害防止のため、植菌作業はできるだけ早めに行いましょう。

植菌後の原木は、菌糸の活着を促進するため「仮伏せ」を行います。原木を地際から40センチ以下の高さに横積みして、ほだ木の周囲を笠木や遮光ネット等で風が当たらないよう被覆し、上面は雨が良く通り、かつ日陰が出来るようにして、保温と保湿を図りましょう。

2 寒子づくり

寒子は厳寒期に採取される1年のうちで最も品質の良いシイタケです。肉厚のシイタケ生産が可能ですが、防風垣の設置などほだ場の湿度の保持

や、袋かけによる保温・保湿に努め、シイタケの成長を促す必要があります。

また、散水を行う場合は、採取予定日の一週間前にはやめて、日和子での採取を心がけるとともに、シイタケが凍結しないよう散水時間等にも注意しましょう。

3 採取

発生したシイタケは、目標とする品柄に応じ、若干早めに採取しましょう。

(小田 三保)

◆ たばこ

明けましておめでとうございます。本年も目標を見定め、品質・収量安定化に向けて取り組んでいきましょう。

今月は、本畑準備等が主な作業となります。

- 1 肥料設計は、土壌検定結果及び前作物調査を参考に行いましょう。
- 2 堆肥散布は、スジまき散布を行いましょう。また、大柄、晩作化、グレー葉生出防止のためにも、未熟堆肥の投入は避けましょう。
- 3 前作物等の関係で、たばこ予定ほ地に影響が出ないように計画的に本畑の準備を行いましょう
- 4 練り畦防止の為、畦立は、土壌水分が60%程度（土を手で握って広げ、できた塊を指で押した時2～3個に割れる状態）を目安に、移植一ヶ月前までに実施しましょう。また、併せて溝掘機等を使い排水溝を完備しましょう。
- 5 肥土消毒や土壌消毒を行う際には、農薬使用基準に沿って使用しましょう。

(井上 馨)

内容の詳細について

1月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

★「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

なになに農業アラカルト

ご存知ですか？毎月7日8日は「みやざき花の日」



今回は宮崎の花をもっと県民の皆様を知っていただくということで、平成23年からスタートした「みやざき花の日」について紹介します。

県内の花き生産者、お花屋さん、関係機関等で組織された「みやざき花で彩る未来」推進協議会では、県産花きの消費拡大とPRを目的とした「みやざき花の日」プロジェクトを展開しています。

「みやざき花の日」プロジェクトに取り組み始めたきっかけは「地元の花を知っていただくため、語呂合わせで毎月8日と7日を『は(8)な(7)』の日としてフェアをしたらどうだろう!」というお花屋さんの提案でした。

現在、県内のお花屋さん33店舗が「みやざき花の日」プロジェクトに参加しており、「みやざき花の日」フェアでは87(ハナ)にちなんだ値段のお買い得商品や切花鮮度保持剤のプレゼント、各店舗が工夫をこらした県産花きのPR用POPを作成するなど、お客様の来店につながる企画を実施しています。

また、今年度は毎月7日8日の花の日フェアのほかに、参加店合同企画として、お買い上げいただいた方を対象に、参加店で使えるオリジナルギフト券などが当たる抽選会を開催しています。

まだ始まって2年目の取組ですが、花の日フェアや抽選会を通してお客様と会話するきっかけができた、来店された方に喜んでもらえた、など消費拡大の取組に対するお花屋さんの意識も変わってきています。

参加店舗も増加し、「みやざき花の日」の認知度も少しずつ高まっています。

「みやざき花の日」の目印は店頭でのぼり旗とポスター(写真参照)です。次回の7日、8日は、ぜひお近くの参加店へお立ち寄りください。

また、2月は7、8日の「みやざき花の日」、9日、10日にイオンモール宮崎で開催される「みやざき花の祭典2013」、14日のフラワーバレンタイン（※注1）までの1週間は『Miyazaki flower Week』とし、子供から大人まで、男性も女性も楽しめるイベントなどを行っていきます。

※注1 フラワーバレンタインとは2月14日に男性から女性に花を贈る取り組みです。

花の日や参加店の情報は「みやざき花で彩る未来」推進協議会ブログ (<http://ameblo.jp/hanamiraikyoku/>) で紹介しています。また、毎月7日の宮崎日日新聞にも広告が掲載されていますので、ぜひご覧ください。

「みやざき花の日」をきっかけとして、花のある生活を楽しんでみてはいかがでしょうか。

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設果菜類	病害全般	－	コスト低減のため、夜温を低めに管理したりハウスを多重・多層被覆にしているところでは、施設内が多湿になりやすく病害の発生が助長されるので、換気や早朝加温など適切な温湿度管理に努めます。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 褐斑病 灰色かび病 菌核病 つる枯病	並 やや少 やや少 並 並 並	うどんこ病は乾燥した条件下で、その他の病気は高温、多湿条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。 いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。 また、罹病葉は重要な感染源となるので適宜除去し、ほ場外に持ち出し適切に処分します。
	黄化えそ病 ※ (MYSV) ミナミキイロアザミウマ	－ やや少	感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。 また、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、最少でも7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	病害虫全般(改植時の留意点)	－	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は20日間以上蒸し込みます。 また、前作に褐斑病などの発生があった場合は、後作きゅうりの定植後直ちに予防散布し感染を防ぎます。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病 菌核病 黒枯病	並 並 並 前年、前々年と同程度	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。 また、罹病葉は重要な感染源となるので適宜除去し、ほ場外に持ち出し適切に処分します。
	アザミウマ類※	やや多	ヒラズハナアザミウマの発生が多く、防除情報を発表しています。この時期は卵・幼虫・蛹・成虫が混在しており、卵と蛹には防除効果が低いので、最少でも7日間隔で3回の連続防除を行い、多発しているときはさらに追加防除を行います。
冬春トマト	葉かび病 灰色かび病※ うどんこ病 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	並 並 やや多 前年と同程度	灰色かび病の発生は並ですが、例年1月からの発生が多くなる傾向があるため防除情報を発表しています。日中の換気、夜間の保温を行い、また、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努めます。 トマト黄化葉巻病の発病株は、必ず株全体を除去し、土中に埋めるかビニール袋に入れて枯れるまで密閉します。
	タバココナジラミ類	並	
冬春いちご	うどんこ病 炭疽病	やや少 やや少	うどんこ病は多発すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおきます。一方、炭疽病の発病した株は、早期に除去し新たな感染を防止します。
	ハダニ類 アブラムシ類	やや多 並	ハダニ類の発生がやや多い状況です。寄生数が増加してからの防除は難しくなるので、低密度時に防除を徹底します。 また、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されているので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。

- 1) ※は防除情報を発表しています。
- 2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
- 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki> です。

(病害虫防除・肥料検査センター)